集英社版
世界文学全集
31

シュティフター
晩夏

訳＝藤村　宏

集英社

© 1979 Shueisha Printed in Japan

集英社版　世界文学全集　31
晩　夏
一九七九年　十　月二十五日　第一刷発行

訳　者　藤村　宏
編　集　株式会社　綜合社
〒一〇一　東京都千代田区神田神保町三―六―五
電話（〇三）二三九―三八一一

発行者　堀内末男
発行所　株式会社　集英社
〒一〇一　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話　出版部（〇三）二三〇―六三六一
販売部（〇三）二三八―二七八一

印刷所　凸版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします
定価は帯に表示されています

0397-168031-3041

目次

晩夏　藤村宏訳　3
後記・注解　489
解説　藤村宏　493
年譜　507

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

晩　夏

―ある物語―

第Ⅰ巻

1　家　庭

私の父は商人だった。父は都*心にあるかなり大きな建物の二階を一部借りて住居にしていた。同じ建物には店や事務室もあって、そのほか商品倉庫や商売に必要なものがあった。二階には私たちのほかは、二人きりの老人夫婦が住んでいるだけで、この人たちは年に一度か二度私たちのところで食事をし、祝祭日や訪問日にはおたがいに行き来していた。長男の私と二つ年下の妹、子どもは二人である。私たちは小さな部屋を一つずつあてがわれ、そこで子どものときから規則的に課せられた仕事をし、夜はその部屋でねむった。母は子ども部屋で私たちの世話をした。時には、居間で遊ばせてくれることもあった。

父はたいてい店や事務室にいた。正午になると二階にあがってきて食事になった。店員たちは私たちの食卓で父や母といっしょに食べ、二人の女中と倉庫係は使用人部屋に自分たちの食卓をもっていた。子どもは簡単な料理、父と母には焼肉がつくこともあり、いつも上等な葡萄酒、店員たちにも焼肉と同じ葡萄酒がついた。はじめのうちは簿記係が一人と店員が二人だけだったが、その後四人になった。

かなり大きな部屋があって、ここには光沢の美しい寄木細工の幅広い書棚があった。前面はガラスで、その内側には緑色の絹がかかっていて、沢山の書物がおさめられている。父が緑色のカーテンをかけたのは、書物の背に普通金文字で印刷してある標題がガラスごしに読まれて何か蔵書を自慢するようになるのを好まなかったからである。食事のあとなどすこしでも暇があると、よくこの書棚の前に立って、とびらをあけ、書物をながめ、一二冊とり出すと、ちょっと中をのぞいては、また元の場所におさめていた。晩は用事があって不在の折とか、好きな芝居に母といっしょに出かけたりする折を除けば、ほとんど外出しなかった。書斎でよく一時間も二時間も、あるいはそれ以上も、読書をしていた。机は精巧な彫刻をほどこした古風なもので下に敷いてある絨毯もまた古風だった。こういうときは邪魔をしてはならず、誰でも書斎を通ってはいけなかった。やがて父は出てくると、さあ夕食にしようと言った。夕食のときは店員がいなくて、母と私たちだけだった。父は夕食のときにはよく話しかけ、さまざまな話、ときには、お

どけた話やおとぎ噺をしてくれた。読んでいた書物は、いつもきちんと、書棚におさめた。父が出てきたあとすぐに書斎に入っても、今しがたまで、誰かがここにいて、読書をしていた気配は全く認められない。どんな部屋でも使ったあとが残っていてはいけないのであって、いつも客間のようにきちんと片づいていなければならなかった。しかしそのためには、なんのために使うのかはっきりしていなければならない。父の言う「雑な部屋」、つまり寝室でもあるし遊び部屋でもあり、またその他でもあるというように、同時にいろいろなものになるような部屋を父は好まなかった。——どんなものでも、どんな人間でも、ただ一つのものにしかなれないが、この一つのものに完全にならなければならないと、いつも言っていた。このきびしい几帳面な性格は私たちの心に深い感銘を与え、両親の命ずることには、たとえ理由がわからない場合でも、従うようになった。たとえば、両親の寝室には幼いころでも入ることを許されなかった。年よりの女中が寝室の整理や掃除をまかされていた。

部屋にはあちこちに絵がかかっていた。またさまざまな道具のおいてある部屋もあった。このような道具は時代物で、奇妙な人の姿が彫刻してあったり、いろいろな木で作った寄木細工の唐草模様、円形や線形の模様がついていた。貨幣の入っている簞笥もあって、父はときどきそれをいくつか見せてくれた。とてもきれいなターラー貨幣があった。甲冑をつけた男たちや豊かな捲毛のある顔が刻印されていた。非常に古い時代のもあって、美しい若者や女性の顔が印されていたし、また足に翼のある男のもあった。父はまたさまざまなものが刻まれてある石をもっていて、大切にしていた。これは歴史上最も芸術的にすぐれた国、古代ギリシアで作られたと言っていた。友人たちに見せるときもあったが、彼等は石をおさめてある小簞笥のそばで長い間立ったまま、石を一つまた一つと手にとって、石についての話をしていた。

よその人たちが訪ねてくることもあったがあまり度々ではなかった。私たちの遊び仲間の子どもたちが招待されたり、私たちが両親といっしょに出かけて、遊んでくれる子どもの家に行くこともあった。授業は家で先生方から受けた。この授業と課せられた宿題をする勉強の時間が規則的な日課で、これに違反してはならなかった。

母はやさしい人で、私たちを大変かわいがってくれた。もし父をはばかる気持がなかったら、遊んで、きめられた日課に違反しても、きっと許してくれたであろう。家中まめに歩きまわり、整理整頓に気をくばり、父の方針に従って、例外は一切許さなかった。そして私たちにとっては、一点の非の打ちどころもない父と同様に、尊敬すべき善の模範であった。家の中では普段はごく質素なみなりをして

いた。ただ時々、父といっしょにどこかへ出かける折など、立派な絹の服を着て装身具をつけると、まるで絵本に描かれている妖精のように思われた。そのようなとき、よく輝くけれど形はいたって単純な宝石をつけていたことが印象に残っている。父は母に細工をした宝石をつけさせなかった。——宝石はそれ自体が美しい形をもっているのだと言っていた。

私たちがまだとても幼いころには、夏はいつも田舎ですごした。父は仕事で都内にとどまっていなければならなかったので、いっしょにはなれなかった。けれども日曜や祭日にはいつも田舎で一日中私たちと生活を共にして、泊っていった。週日には私たちが一二度父を訪ねた。そのときは父が私たちをもてなして泊めてくれるのだった。

このような生活はやがて終りになった。一つには父が年をとって、尊敬する母がいなくてはすまされなくなったのと、郊外に庭つきの家が手に入ったからである。私たちは大気に思う存分ふれて体を動かし、一年中田舎に住めるようになったのである。

郊外に家ができて、とても嬉しかった。都心の古い陰気な家から郊外の住み心地のよい広い家に引越が行われた。父は前もって全体の調度を整えさせてあったけれど、住むようになってからも、まだあちこちの部屋で職人が仕事をしていた。この家は私たちだけのものだった。家族以外には店の人たちと年配の門番兼庭番が妻と娘とともに住んでいるだけだった。

父は都心に住んでいたときよりもずっと大きな部屋を図書室にして、また特別に絵のための部屋を一つ設けた。以前は部屋が足りないので、絵を方々の部屋に分散しておかなければならなかったのである。この新しい絵画室の壁は濃い赤褐色の壁掛でおおわれていて、金の額縁がくっきりと際立って見えた。床には色の淡い絨毯が敷いてあって絵の色に影響しないようにしてある。父は茶色の木で画架を作らせて、この部屋に据えておいた。絵を一枚ずつおいて、ちょうどよい光にあてて眺めるためである。

古い彫刻のある寄木細工の道具類のためにも特別の部屋が設けられた。父がいつか山から持ち帰った菩提樹と五葉松の材木で造った天井板があった。この天井板を組合わせ、他の板を目立たないようにすこし加えると、この部屋にぴったりと当てはまった。これを見て、私たちは子ども心にも嬉しく思ったものである。晩になってこの古い部屋に父と母に連れて行ってもらうのが、いままでより倍も楽しみになった。私たちはここで勉強をしたり、このような道具類が作られた昔の話をしてもらった。

父は二階の庭に面した板張りの廊下の端に、ガラスの小部屋を造らせた。庭が見える両方の壁は全部ガラス張りで、後ろの壁は板張りである。この小部屋にはさまざまの時代

のさまざまの形をした古い武器が収められた。ガラス窓の柱には下の庭から沢山の木蔦をはい上がらせ、窓枠にもはわせたので、窓をあけると古い武器のまわりで、木蔦が風に吹かれてさらさらと音を立てるのだった。大きな木製のこん棒もあって、おそろしい釘がきらきら光っていたが、父はこれを「朝の星」*（明けの明星）と呼んでいた。私たちにはそのわけがわからなかった。朝の星はもっと美しいものだった。

小さな部屋がもう一つあった。父は前に買っておいた精巧な縫取りのある赤い絹の布を壁に張らせた。しかしこの部屋に何がおさめられるのか、まだわからなかった。

庭には背の低い果樹があり、野菜畑や花壇があった。奥の方は背の高い樹が植えられ、芝生になっていて、そこからは、半マイルほど距離をおいて都を大きく弓なりにとりまいている山々が見えた。以前からあった温室は、一部を修繕し、一部は建増して拡張した。

そのほか庭に面して、広い中庭があった。庭の草が濡れているときには、ここで遊ぶことになっていた。母がしょっちゅういる台所や貯蔵部屋の窓はこの中庭に面していた。

父は毎朝都心の店と事務所に出かけた。店員たちがいつもお伴をすることになっていた。正午になると父は食事に帰ってきた。食事の時、店番に当っていない店員たちも帰ってきた。父は午後もたいていまた都心に出かけた。日曜祭日は私たちといっしょにすごした。

さて、家が広くなったので、都内からいままでよりも頻繁に子どもづれの人たちが招かれることになった。私たちは中庭や庭で遊んだ。先生方も以前と同じように今度は郊外の家へ来てくれた。

父は長時間机についているため健康をそこなう危険があった。母に催促されて、毎日自由な時間をつくって体を動かすことにしていた。時々画廊や、絵を見せてくれる友人のところに行ったり、珍しいものが見られる人のところに紹介を受けて出かけた。私たちは夏になると祝祭日には野外に出かけて、村や山で一日をすごすこともあった。

母は郊外の家が手に入ったことをこの上なく喜んで、これまでにも増して家事にせいをだした。毎土曜日には庭の物干場に亜麻布が「桜の花のように白く」輝き、部屋は一つ一つ母の監督の下に掃除された。ただ父の貴重品がおいてある部屋は別で、これはいつも父の眼の前でほこりをはらったり、磨かれなければならなかった。庭の果樹や花や野菜の世話は母が父といっしょにした。母は近所で評判になり、近所の奥さんが来て、私たちの家で奉公をした人を譲ってほしいと所望した。

私たちはだんだん大きくなるにつれて両親と生活を共にすることが多くなった。父は絵を見せて、いろいろと説明をしてくれた。自分が持っているのは古い絵ばかりで、い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

つか売る必要があるような場合にはそれ相応の価値があるものだと言っていた。散歩に出かけると、光と影の作用を示し、対象物にそなわっている色の名前をあげ、さまざまな線が動きを生みだすが、動きの中には静けさがあって、この動きの中にある静けさこそあらゆる芸術作品の条件なのであると説明した。書物についても――人類の起原から現代にいたるまで起ったことが書いてある本が何冊もあって、そこにはずっと昔、千年以上も前に生きていた有名な男や女の人たちの物語が語られている。また、人間が長い歳月の間に世界やその他の事物に関する制度や状況について経験したことが書いてある本もあるし、現実の事件や状況ではなく、人間の思考や予見、あるいは、現世や天国に関する見解を述べた本もあるのだと話していた。

この頃に、母方の大伯父が亡くなった。母はその前に亡くなった大伯母の装身具を、私たちは大伯父の残りの財産を相続した。父は私たちの当然の後見人としてそれを安全な方法で投資し、毎年あがる利子をそれに加えた。

私たちが成人してこれまで受けていた授業も次第に終るときが来た。だれにも必要とされている学科の初歩を教えていた先生が来なくなった。将来教養ある階層あるいはすぐれた階層の一員になるような子どもたちのための学科を教えていた先生の数も減った。妹の方は、いくつかの学科の授業をつづけるとともに、だんだんと家事の手ほどきをうけ、将来は母の仕事を立派に果せるように、家事の中で一番大切なことを習うようになった。私は学校で職業のための知識や準備と見なされている学科を習得してから、更にもっと難しくて先生の助けが必要な学科の勉強をつづけた。最後にいよいよ私の将来をどうするかという問題になったが、このとき、父は世間の人々から大変非難された。つまり、父は私を専門のない学者にしようとしたのである。私はそれまで非常に熱心に勉強をしていた。そして先生の出した課題にはどれもみな熱意をこめてとりくんだので、学科の成績が問題になるときは、いつも評価が非常に良かった。専門をきめない学者という進路は、私が自分で父に求め、父もこの求めに応じたのである。私がそれを父に求めたのは、何か私の心の中で強く迫るものがあったからである。私はまだ若かったけれど、あらゆる学問の習得など、不可能なことはよく承知していた。けれども、何をどれだけ学んだらよいのか、その点がはっきりしなかったし、学問にひかれる気持も同様にはっきりしていなかった。努力して到達する利益が格別心に浮んでいたわけではなかったが、どうしてもそうしなければならないような気持、何か内面的に価値のあるものや重要なものが将来にあるような気持だった。しかし具体的に何をやり、どこから始めたらよいのか、私にも両親にも見当がつかなかった。特に好きな専門科目は全くないし、すべての科目に努力の価値があ

るように思われた。特にある対象にすぐれた能力があると考えられるところもなく、なんでもやればできるように思われた。両親も、私に何か一つの職業にだけむいている適性があるとは認めなかった。

父が非難された理由は、私の進路が途方もないものだという点にあったのではない。世間の人々の言い分は——市民社会に役に立つような地位につけるべきなのだ。時間と生活を社会のために捧げ、いつの日かこの世を去るとき、責任を果したという自覚がもてるようにすべきではないかということだった。

このような非難に対して父は次のように答えた。——人間はまず人間社会のためにではなくて、自分自身のために最良のあり方であるのだ。そして各人が自己自身のために最良のあり方で存在するとき、人間社会のためにもまた最良の存在となる。神によってこの世で最もすぐれた画家となるように作られた人がもし司法官になろうとしたら、その人は人類に対して悪しき奉仕をすることになろう。最高の画家となってこそ世界に最高の奉仕をするわけなのであり、そのためにこそ神はその人間を作られたのである。これは常に心の内なる衝動によってあらわれるのであって、人はこうしてある事物へと導かれ、従うようになる。もし心の中にそれを告げ知らせ、幸福と満足を見出す事物に導く精神がなかったら、われわれは芸術家になるのか、将軍になるのか、裁判官になるのか、この地上で何をなすべく定められているのか、知る由もないではないか。神は人間の才能を適切に配分されているのであって、この世で行わるべき仕事がそれぞれに果されるようになっているのだ。だからすべての人間が同時に建築家になるような事態は起らないのである。才能の中にはたしかに社会的なものもあって、偉大な芸術家、法学者、政治家たちは、公正と寛大、正義と愛国心を常にもっていた。そして自己の内なる性格を最大限に陶冶した人々の中から、祖国の危急を救う人々があらわれたのである。

自分は人類の福祉のために商人、医師、官吏などになったと言っている人々があるけれど、たいていの場合、それは真実でない。内心の召命*に従ったわけではないのであって、それを口実にして、地位を金や財産や生計の資を得るための手段と見なす悪しき根拠を隠しているのである。職業の選択について深く考えもせず、また、何かの事情に迫られて職につきながら、弱みを見せないために人類の福祉を追求するなどという人々もいる。更に、絶えず公共の福祉について語る種類の人々もいる。それは自分自身の始末ができない人々なのである。かれらは困窮におちいり、憤懣と不快を心にいだいているのが常であるが、それは自分の軽率のためなのである。そこで手近ないいのがれとして、自分の境遇を社会状態のせいにする。——本当は祖国に思

いを致しているのであって、自分ならば万事最良の政策が行えるのだがと言う。しかし、現実に国がそのような人々を招く事態がおこると、かれら自身の不始末と同じ結果になってしまう。この種の人々は混乱した時代には最も利己的な人間となり、また最も残酷な人間となりやすい。しかし、神が社会的な志向と社会的な才能を特別に付与した人々がいることも疑いをいれない。このような人々は内発的な動機によって社会問題に献身して明確に認識し、その解決に喜びを見出し、使命のために生活を犠牲にする。生活を犠牲にする期間が長くとも短くとも、喜びを感ずるのだが、それは心の中から迫ってくるものに身を委ねたからなのである。

神は、われわれが行動する際に、われわれ自身にとっても他人にとっても、有用という目的をあらかじめ示されない。神は徳の実践に独自の魅力と美を与えられる。高貴な心情の持主はそのようなものを求めて努力するのである。悪が人類のために有害であるという理由で善をなす者は、倫理の段階のかなり低いところに立っているのであって、もし罪悪が人類や自己自身に役立つとなれば直ちに罪悪に手を出すであろう。それは祖国や自分の家族や自己自身のためには手段をえらばず悪をなす人間である。このような人間が大がかりな活動をした場合政治家と呼ばれたけれど、それは本当の政治家ではなかったのだ。かれらが獲得した利益も一時的なものにすぎず、本当の利益ではなく、歴史の審判において、不幸な災にほかならぬ事実が立証されたのであった——。

このような父の意見が利己的なものでなかったことは、父が都参事会で公の仕事を無償で行い、このため徹夜で働いたり、公共の寄付にはいつも相当多額な金を出して人後に落ちなかった事実が証明している。

父は、私に思うようにしたらいい、まだはっきりしてないものの中から、いずれ何の役に立ち、世の中でどんな役割を演ずるか、明らかになるものが展開するだろうと言うのだった。

私は体育の訓練をつづけた。私たちはごく幼い子どものころから、必ず体の運動を出来るだけ行っていた。夏田舎に住んだのもそのためだったし、父が郊外の家を買った主な動機もこの家に庭があるためだった。幼い子どものころは好きなだけ歩いたり走ったりして、疲れて休むとそれで終りだった。都内には体育の施設があった。ここでは一定の順序で体のすべての部分を必要に応じて鍛え、自然に即した発育を促すような運動が行われた。父は経験のある人たちに助言を求め、この施設を見学して確信をえてから、私をここへ通わせた。当時は女子のための施設がまだなかったので、かかりつけの医師でこのような体育を奨励している人とも相談して、家の部屋の中に必要と思われる設備

をした。そして妹もこの設備をできるだけ利用して体を鍛えていた。郊外の家が手に入ってから、もっと都合がよくなった。体育の設備を今までよりも十分にゆったりとそなえる余裕ができただけでなく、中庭や庭で運動ができたし、設備も拡張できた。私たちがとても喜んだのは、血気盛りの若者として当然である。水泳も子どものときに習った。夏にはほとんど毎日のように、郊外から遠いプールに通った。そのころには、もう女子のプールもできていた。そのほか、特に夏にはよく遠足に出かけた。町はずれの広々としたところに来ると、両親は私が妹といっしょに方々歩きまわることを許してくれた。私たちはかなりの道のりを歩いたり、山に登ったりして体を鍛えた。それから両親が待っている場所に戻ってきた。最初はたいてい召使が一人ついてきたが、大きくなってからは、私たちだけで行かせてもらった。やがて父は母といっしょに郊外の好きな場所に気軽に行けるようにと二頭立の馬車を購入した。庭番をしていて、時には私たちの監督者になっていた召使が馭者になった。乗馬学校では時々少年や少女もレッスンがうけられて、ここで習っていたが、その後一定の日時を定めて通えるようになった。家の庭では目標にむかって跳んだり、幅の狭い厚板の上を歩いたり、つり棒などをよじ登ったり、石の円盤を正確に投げたり、投擲の距離を伸ばす練習をした。妹は近所の人たちからお嬢さん扱いにされていたけれど、家庭のいわゆる水仕事に手を出すのが好きで、その心得があるだけでなく、子どものときからこのような仕事をしている人たちにも引けをとらないところを見せた。両親は妹がこういう仕事をしても妨げるどころかむしろ良いことと認めていた。妹はそのほか本を読み、音楽ではピアノとハープをひき、ハープにあわせて歌もうたい、水彩画を描いた。

語学を習っていた最後の先生から離れ、難しくて重要なため長期の授業が必要と考えられていた学科でも先生につく必要がないと思われるところまできたとき、学者としての進路について一定の計画をたてて、そのために先生につくべきかどうか考えなければならなくなった。私はもう先生にはつかないで自分でやってみたいと考え、父も私の希望をいれてくれた。先生なしで自分一人でやれるのが大変嬉しかった。

私は高名な学者で都の研究機関に勤めている人たちに助言を求めた。この人たちには、礼を失しないようにして近付いた。学習に関する質問をするだけで交際を求めたわけではなかったから、私の訪問を煩わしく思う人はなく、答えはいつも非常に親切で心がこもっていた。時々家にくる人たちの中に学問に通じている人もあった。私はこの人たちにも質問をした。その内容は書物やそれを読む順序に関することである。初めのうちはすでに授業を受けた科目の

勉強を更につづけた。そのわけは、当時そのような学科は一般的な人間的教養の基礎とみなされていたからである。ただ、今までよりも系統的にすすめるとともに、他方では興味を覚え始めた科目の勉強を拡げることにした。こうして、全体としてかなりの程度のまとまりが得られるようになった。将来の志望がまだはっきりしていない場合には、さまざまなものに目移りがして、些細な点で全体を見失う危険がある。今度勉強を始めた科目に関しては、都の研究施設で役に立つところを訪れた。図書館や機械工具の博物館、特に実験ができるようなところである。これまではまだ未熟だったし機会もなく、器具もなかったので、実験は一度もできなかったのである。必要な書物や教材は父がいつでも進んで買ってくれた。

私は非常に勤勉だった。好きなことをするときの青年に特有の燃えるような熱意のすべてをあげて、自分の選んだ対象に打ちこんだ。体育や文化関係の施設を訪れるときや家によその人たちが来たり私たちがよその家を訪れるときなど、非常に多くの若い人々と知合になった。その人たちの中には、単なる娯楽それもつまらないものに夢中になっている人が沢山いたけれど、私は全く興味がなかった。お客があって、家でみんなが楽しむのは、いつもまじめなものだった。ずっと年上の人たちとも知合になったが、その頃は年配の人たちにはあまり関心がなかった。若者の常として、年齢の近い人の方に心をひかれて仲間となり、年上の人たちには眼をむけなかったのである。

十八歳になると、父は大伯父から相続した私の財産の一部を私に管理させた。私はそれまでお金を予算をたてて使ってはいなかった。何か必要なものがあると父が買ってくれたし、金額のすくないものは自分で買うようにとお金を渡されていた。娯楽のためにも時々少額のお金をもらっていた。「しかしこれからは」と父は言った。「毎月一日にきまった額の金を渡す。これについては帳簿をつけなければならない。私はお前の財産を管理しているから、支払った金額をそれから差引いておく。私の帳簿とお前のと合っていなくてはならない」。父は私がこれから毎月支出できる金額を記した紙を渡して言った。「今後はこの金額で買えるものには金を出さない。金はきちんと扱って倹約しなければならない。それというのも、たとえどんなに差し迫った場合でも、前貸しは決してしないからだ。お前がある期間満足の行くように経済のやりくりができたら、渡す金額をふやす。お前が法律上の成人となる前に財産を全部渡そうと思っているが、その時期は十分に考えてきめよう」

2　旅　人

私は父から渡される月極めの金を上手に使った。そこで

しばらくたつと、約束通り、経済の枠が拡大された。必要とするものの一部だけでなく、全部をあてがわれた金で支弁するため、渡される金も多くなった。一月毎ではなく、長い期間に慣らすため、三月毎に渡されるのである。半年とか何年毎では、高額で整理がつかないようになってはいけないという配慮だった。父は大伯父の遺産の利子を全部ではなく一部だけ私に渡し、残りは基本財産に加えたので、私が貯えをしなくても、財産が増える結果になった。生活の上で受ける制約は、両親の家に住まい、食事を共にすることだったが、その費用は一定の額がきめられ、三月毎に支払った。その他、必要なもの、衣類、書物、道具類などは、自分の判断と考えで買った。

妹も大伯父の遺産については、若い娘にふさわしい範囲で、それを処理する権限が与えられた。

私たちはこのような措置を非常に嬉しく思い、両親の希望と意志にそって行動してよろこばせようと心にきめたのであった。

私は教養ある人間にとって一般的に必要とされるさまざまの知識を先生について学んだ後、数学の勉強に移った。——数学というものは最も難しく最も素晴らしい学問であって、他のあらゆる学問の基礎である。その中ではすべてが真実であり、それから得たものは一生なくならない財産であると常日ごろ聞かされていたのである。すすめられた本を買って、今までに習った予備知識から出発して、もっと程度の高い段階に進んだ。計算練習のため大きな石盤を買い、学習のために定めた時間に机について計算をした。この学問を構成し更に展開した学者たちの足跡をたどった。ある期間をきめてその間は先へ進まないで、それまでやったことを繰返し、しっかりと記憶した。順をおって読む予定の本を書架にきちんと並べておいた。しばらくするとこの学問の高度な分野でかなり難しいところまで進んだ。

父は、夏の間私がしばらく両親のもとをはなれてどこか田舎で住むことを許してくれるようになった。このような滞在の手始めとして、都からあまり遠くないところにある父の友人の別荘が選ばれた。この家の二階に小さな部屋を一つあてがってもらった。窓から近くの葡萄山とその谷間に遠くの山脈が見晴らせた。家の主婦は雪のように白いカーテンを絶えず取替えてくれた。両親はしげしげとやってきて田舎で一日をすごした。私も時々両親の家に行って泊った。

翌年の夏、二度目の滞在個所は、都から遠く離れた農家だった。農村では普通居間やその他の部屋がすべて一階にあるが、更に二階をあげてここに一つまたはいくつかの小部屋をそなえている家もある。二階の部屋は一つだけという場合が多く、これは客間ともいうべきものである。こういう部屋には上等なベッドが二台おいてあり、晴着をおさ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com